

twitter小説
@makeanovel



第1章

螺旋階段が世界を振（ね）じっていく。ぎりぎりと絞るように振じるのではなくて、音もなく真空の鋭さで溶けたガラスを飴のようにぐにゃっと曲げるごとくに、だ。その無音の執行のなかで、わたしの視点は高い場所にあることに気づく。

上空二万五千万フィートからわたしは見渡す。あるいは見下ろす。さらなる高みを見上げることもある。

ほとんどそれは、つややかな大粒の葡萄。はちきれそうに水分を湛えている果実の球面は、夜を映している。それはいまや、みずみずしく濃くにおいたつようなバイオレットの球となって浮かんでいる。・・・宇宙に。それが本来の地球の姿だ。複雑で繊細なこの天体には、能天気な青空みたいなブルーではなくて、高貴なほど暗い夜の色のほうが似つかわしい。

大地と呼ぶにはいささか貧弱な平原が、北半球上に横たわる。しかし、その細長い列島においてはほとんど唯一といい、まとまった面積を持つ平野だった。今、平野には巨大な影が落ちている。うつくしい董色の影。

夜だった。夜とは宇宙そのもの。宇宙とは夜そのもの。世界とはいつだって夜なのだ。だから地球も夜の色をしているし、地球は夜の状態こそが正常なのだという気にさせられる眺めである。細長いこの列島のシルエットは、ユーラシア大陸の極東に従順に寄り添っているようであるが、しかしこの暗い東の果ての地においては、悪目立ちするくらいなりふりかまわない光を放っていた。ひときわ明るいのは、列島のちょうど中ほどに位置する、大海に面したその平野の地域だ。

「こちらボーイング七七七、着陸態勢に入りました」

飛び交う無線を傍受する。

亡霊のようにたくさんの電波が飛び交い、さらに、夥しい数の飛行物体が天空を駆けている。

光のこぼれるようなその平野には、幾筋かの川の流れが見える。惑星の自転に基づくスピードで風が吹いている。明かりはひとつ、またひとつと消滅してゆく。巨大な都市は、雪の欠片がしゅんと溶けてしまうような儚さで剥がれてゆき、みるみる小さくなっていった。暗転した平野は、いつとき静かな眠りについた。それもつかのま、自転はとまらない。ごうんごうんと轟音が吹きすぎぶこの宇宙に休息はありえない。惑星はその生命を終えない限り、すべての物理的な運動をやめることができない。夜

は終息へと向かうが、しかし次の朝にすんなりと主導を引き渡すつもりはないらしい。時空が歪むように拮抗して停滞する。

そのとき、ぐにやりと、餡がねじ切られる。

朝がやってきたのだ。

世界の様々な位相がずれるのを、全部束にして、強引に、けれどもなめらかに、螺旋状にねじって切るようにして夜と決別する。やがて視点はまた移ろう。わたしは、朝の羽田空港にいる。あの平野に幾筋か流れていた川の河口に、そのエアポートは存在した。

★★★★★★

昨年の秋、羽田空港が国際化して世界への玄関口となり、空港は二十四時間体制に入った。それに従い、わたしの勤務も二十四時間体制となる。

もっとも、かつて羽田が日本で唯だ一つの空の玄関口である時代があった。

飛行機が大空へと羽ばたくに相応しい「羽田」という名前は、飛行機の翼に由来するものだとばかり思っていたが、もともと東京都大田区その辺りの地名だった言うことを、わたしは勤務先の会長の話で知った。会長曰く、その辺りの海はヘドロの堆積した底なし沼状態で、埋め立て工事は非常に困難だと言われていたらしい。しかし長い歳月をかけて大規模な埋め立て工事が完了して羽田は広大な敷地を有する空港となる。大田区の面積の、実に三分の一が羽田空港の敷地で、さらに東京二十三区内で大田区が一番面積が広いということにもなった（埋め立てて面積が増えたせいである）。

会長、つまり初代社長はその時代を懐かしみ、今回の羽田国際化におおいに感激し、退いていた現役に復帰して会長職に舞い戻った。九十歳を目前にしてである。

我が社は、羽田が戦後アメリカ軍から返還され、本格的に民間機が就航しはじめた当初から営業している由緒正しい会社なのだと、その九十歳目前の老人は厳かなそして誇らしい口調で謳い、国際線ターミナルに事業を拡大する旨を全社員の前で述べた。

そして、古参の社員の中では一番英語ができる（と思われている。単に英文科出身だからだ）わたしが国際線ターミナル事業の責任者に抜擢されたのだった。

とはいえわたしは、華々しい客室乗務員でもなければ航空会社に勤める人間でもなく、航空業務に関わるいかなる職務にも直接関わりはない。ターミナル内の軽食やドリンクを出すスタンドの店員として二十年近く働いてきた。

★★★★★★

湿度も温度もコントロールされた建物の中で働いているとはいえ、接客業をしていると、たった今外からやってきたばかりの客が外の空気をまとってくるのを嗅ぐことができた。

男が座ったとき、底冷えする都会の雨の匂いがカウンターのこちら側に届いた。見ればかっちりしたスーツに雨滴が弾かれている。ぐっしょり濡れているわけではないので、タクシーを降りてターミナルの中に入るまでに歩いたときに濡れた程度なのだろう。冷えびえとしたその雨の匂いは一瞬漂ったあと、すぐに均一に 調べられた空気に同化する。

「コーヒーをお願いします」

国際線ターミナルなのだから勿論日本語以外を話すお客さんも多い。彼はモンゴロイド特有の顔立ちをしているが、スーツの着こなしは日本人の一般的なサラリーマンに比べて図抜けて洗練されている。そのせいだけではないのだろうが、男が 日本語を話さないのではないのかとわたしは一瞬身構えた。身構えもしたし、あまい期待が胸をよぎりもした。わたしは毎度毎度店の客にこんなふうにいちいち 個人的な感情を募らせているわけではない。そんなことをしていたら身がもたない。20年近い勤務のなかでこんなことは初めてだった。

ハンサム、だというだけでない。筋肉質の削げたような顔はどうしようもなく野生的なのに、ビジネスマンの仮面を無理に被っているようなあやうさが、単純に悲劇的なヒーローめいた印象を作り出しているのだろうか。

英語でも中国語でもなく、もちろん日本語でもない言語の体系の中で生きているという印象がした。

しかし、あっけなく「コーヒーをお願いします」という日本語がわたしに届き、いや、ここは日本の空港なので、通じやすいと思われる日本語を使ったに過ぎないのではないのか、という疑念が浮かび、わたしはそれを遊びのように転がした。

そして、彼の声が案外幼くて、しかも、「完璧に育ちがよい」と思わせるお坊っちゃんふうに行儀よかったことがわたしを撃ち抜いた。

忙しいときは作り置きしておいたものを出すのだが、わたしは彼に出すコーヒーを最初から丁寧に、しかし手早く淹れた。

客は彼ひとりだし、他愛ないことでよいから話しかけたい誘惑にかられたが、それを抑えて、いつもよりほんの少しだけ笑顔を多めに作ってそれを彼の前に置いた。

「ありがとう」

彼はまた「完璧に育ちがよい」ふうな喋り方でそう言った。わたし個人に特別な思いの込められた言葉ではなくとも、今自分が彼にコーヒーを渡して礼を言われている店員であることに感謝した。

今は午前4時過ぎで、この時間帯に空港についたばかりだとすると、朝の6時台に立て続けに出発するいずれかの便に搭乗する客だろう。現段階で羽田発の国際便は深夜から早朝にかけての時間帯に多くの長距離路線を飛ばしていた。

彼がコーヒーを飲む間、他に客はこなかった。そろそろ客の増える時間帯なので、いつもこの時間でも客は途切れることがなかったが、カウンターに彼が座って、カウンターの中にわたしが立っているという二人きりの舞台の脚本をわたしが都合良く書いたみたいに、ずっと二人きりだった。

男は英語で書かれた、表紙の写真が熱帯のしたたるような緑である雑誌を読みながらコーヒーを飲んでいる。見出しがわたしからでも判読できるが、経済誌のようだった。そして飲み終わると、会計を、という意味でわたしのほうを見てやわらかい表情を作った。

思いがけず親しみのある表情を向けられてわたしは顔面が熱くなるのを感じる。あくまで馴れ馴れしい態度を取らないように節度を持ってわたしはレジの前に立った。

「500円になります」

男がクレジットカードを差し出した。

この金額だとサインレスでいいのだが、カードの裏の署名を確認するのはいつもの習慣だ。わたしがそうしたいと意識したのかしなかったのか一瞬のことだったので今となってはもう判らないが、その名前はしっかりとわたしの記憶に刻印された。

Katsutoshi Saito

さいとう かつとし

彼がってしまったあと、いきなり客は増えはじめ、そう、彼が席を立つまでどこかでみんな隠れて待っていてくれたのではないかと思われるくらい一斉にやってきて、さらに途切れることなく、わたしは忙しく働き続けることになった。

それでも一度記憶したその名前を忘れることは決してなかった。

さいとう かつとし

さいとう かつとし

繰り返し名前がわたしの脳裏に立ち現れていく。

さいとう かつとし

本当にわたしの脳裏だけに立ち現れているのだろうか。もしかするとわたしの周囲には「さいとう かつとし」の文字が浮遊していたのではないか。ひらがなたちはぐるぐるとわたしのまわりを取り巻いている。「さ」や「い」や「と」や「う」が、そして「か」が、「つ」が、「と」が、「し」が、羽虫のようにわたしにまとわりついて飛んでいるのではないか。

前の晩の8時に店にたち始め、5時には一応わたしの受け持ち時間が終わった。夜の時間帯も本来は二人で店を回すことになっているが、昨夜はたまたまアルバイトの男の子が急に熱が出て休んだのだ。

ピンチヒッターを探すにしろ、代役を探す役目のわたしが店にたってしまうともうその仕事をやってくれる人間はおらず、結局朝まで一人だった。本社のマネージャーには昨晚、電話をしたが通じず、留守電に用件は入れたが、そのまま夜が明けてしまったのだった。所詮は零細企業なのだった。

0時をまたぐ時間と、男が去ったあとにかなり忙しくなったものの、一人でなんとかあったことにほっとした。始発に乗ってきた後輩社員の男の子と、アルバイトの女の子が5時10分前に登場して、引き継ぎをした。

制服を着替えて、電車に乗って帰宅すべくターミナルの中を歩いていると、わたしの前をゆく男性ふたりの話し声が聞こえてきた。

「今日就航のNY便とロンドン便が羽田に揃ってこれでいよいよ本格的に国際化って感じですねえ」

と片方がいい、隣の相手が頷いていた。

「ゲートの前で5時半から就航セレモニーが執り行われるみたいですよ」

そういえば、NY便とロンドン便は今日就航だったのか。そろそろだとは思っていたが。確か両方朝の6時台に離陸するはずだ。

もしかするとさっきの男は、NYかロンドン、どちらかの都市に飛ぶ予定なのかもしれない。あるいは全く別の都市の可能性もあったが、旅慣れた印象があったのにこれまでうちの店の常連というわけではなかった。

うちの店はコーヒーの味が本格的で、24時間営業ということ、カウンター席だけということからビジネス客の常連が多かった。いつも決まった目的地があるらしい常連がだいたい似たような時刻に現れる。10月から国際線ターミナルが開かれたばかりだが、もうずいぶんと常連客を覚えた。

だからあの男は、今日初めて就航する便を使ってどこかの都市へ飛び、場合によってはこれからも頻繁に羽田を使う可能性があるのではないか。その可能性を思うとわたしは胸が高鳴った。

どちらにせよ、彼はもうすぐ飛行機に乗って、そろそろそれは離陸する。誰かを見送りにきたわけではないはずだ。旅行用のスーツケースを転がしていた。

そう。

日本を飛び立ち、どこか遠い場所へと。

さいとうかつとし

彼の名前の響きをもう一度味わい、そして面差しを思い出してわたしは胸が苦しいような気分を味わう。こんな気分は本当に生まれて初めてなのではないか。

そして今年37歳になろうかというわたしがそんな気持ちを抱いたことに羞恥を感じ、余韻にひたることをストップする。

勤続20年近いというと不惑を越えていると思われることが多いが、わたしは大学1年の18歳の頃からここでバイトをして、そのまま社員になったので勤続20年近いといっても、30代半ばを過ぎたところだ。とはいえもう若くはない女性ということで、ひとくりにされてしまうのかもしれない。

バイトから社員という立場に変わったにせよ、未だに同じ仕事を続けていることには自分が一番驚いている気がする。

いずれにせよ、このわたしが、

国際線に乗るために空港にやってきた、エリートビジネスマン風情の男に、まるで10代の娘のようにのぼせ上がっているというのは、客観的に見ると痛ましいほどの事態なのではあるまいかと自問する。階級など存在しない現代日本に生きているからこそ、わたしはそういう些細な人間の社会的なポジションがくっきりと個人につきつけられてしまうような気がしてならない。いや、わたしひとりで生きていくとすれば、負け犬と揶揄されようが全然平気だという気がする。ただ、自分があまりにもかげ離れた世界に棲んでいると思われる男性にときめいていることが恥ずかしいのだ。昔から、自分を省みず、やたら地位の高い男性に取り入ろうとしている女性を見ると自分の方が恥ずかしさを感じた。そして自分がそういう女性たちの仲間入りをしてしまったような恐ろしさを感じるのだ。ではどういう男性になら慕情を抱いてもかまわないのか。わたしに慕情を抱いてもよいと判断された男性たちはつまり社会の上層部にはいないことになり、だとすると最初から彼らをわたしは馬鹿にしていることになるのではないのか。だからわたしはこれまで誰のことも好きになることはなかったような気がする。

わたしは空港のスタンドで働くという職業が賤しいと思っているわけでもない。30代後半になろうというのに独身であることが哀れだと思っているわけでもない。それもわたしに付随する情報だが決して本質ではない。本質でないことを理由に自分が劣っているというのは簡単だ。でもそのようなごまかしは結局自分自身には通用しないものだ。

わたしはただ、わたしの存在そのものがとことん賤しいのではないかという強迫観念

をずっと抱いているだけだ。生まれたときに、すでにそれを持っていたように思う。両親の育て方のせいだとは思っていない。わたしは確かにそれを生まれたときにはすでに持っていたのだ。自己評価をもともと低く設定して、様々な挫折を味わわなくてもよいようにしているのではない。それは確かに最初からあったものなのだという気がしてならない。

だのにわたしは気がついたらセキュリティチェックの列にならんでいた。

わたしの会社はセキュリティチェックを抜けた後のゲートの並ぶコンコースにも店舗をひとつ構えているのだ。わたしもそちらの店舗にたつこともある。そしてわたしは国際線ターミナル事業の責任者であるためにいつでもセキュリティの向こうに入ることのできる許可証を持っていた。

わたしはさも仕事上必要なことでここを通るのだという顔をして、許可証を見せて金属探知機を通り抜ける。

パスポートコントロールの脇の関係者通路でやはりまた通行許可証を提示して通過してゆく。

店舗のあるほうではなくて、今日のロンドン便とNY便の搭乗ゲートを確認するとまっすぐにそちらに足を向けた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

コンコースは確実にいつもより混んでいた。

今日新しい便がふたつも同時に就航するせいだろう。自分の店の方にはあまり変化がなかったのに、新規の客にうちの店をどのように知ってもらうかという仕事のことが頭をかすめはしたが、すぐに忘れる。

ゲートに近づくと、ずらっとテレビカメラと報道関係者が並び、彼らが囲むスペースに、アメリカとイギリスのそれぞれ今日就航する航空会社の名前がデザインされたパネルが並んでいる。祝福の花輪がずらっと並び、航空会社の関係者らしき、白人のスーツ姿の男女が社交的な挨拶を交わしている。

式典はまだ開始されていないようだが、ちらほらともうカメラのフラッシュがたかれてその場所を特別な高揚感に彩っている。付近のベンチにはこれから就航便に搭乗するらしき乗客がこころもち興奮した表情や喋り声で座っていた。

わたしは空港という非日常には慣れていると思っていたが、その場所があまりにも眩しいことに驚いた。

そもそも空港で働きたいと思ったのは、この非日常の中に存在したかったからだといふに思い出した。自分はこの世界において絶対に主人公としての役を割り振られることはないだろう。しかし脇役どころかその他大勢として生きていくのならば、少しでも気分がせいせいするような場所にいつもいられたらいいと考えていた。

大学に合格して上京するとき生まれて初めて飛行機に乗った。地元の寂れた空港では特別な気分は味わえなかったが、飛行機に乗ってからと羽田に着陸してターミナルで食事をとったときの興奮を今でも忘れることができない。大学生活が少し落ち着いて、アルバイトを始めようと思ったとき、真っ先に羽田空港の求人を探したのだった。

「皆様これからロンドン就航、及びニューヨーク就航の記念セレモニーを開催したいと思います」

マイクの声が割れて響き、司会者の女性が一瞬マイクを口元から話して焦った表情をして、またすぐに冷静な表情を取り戻し、そしてにこやかに次の台詞を発する。

中央に黒づくめの洋服を着た黒人男性と日本人女性のシンガーが登場してアカペラでゴスペルを歌い始めた。歌に合わせた手拍子が起こる。

わたしは人ごみに紛れるように、あたりをうろつく。

そして、「彼」を発見する。いきなり彼は視界に飛び込んできた。一瞬でそれが彼だとわかった。かなり距離があるが、見間違いようがない。

スーツケースは預けてしまい、今は小さな手提げ鞆一つを脇に、ベンチに腰掛けて

いた。姿勢は悪くないが、適度に寛いだ様子で、手にはスマートフォンを持ってそれを眺めては、セレモニーのほうを眺めたりしている。式典を無邪気に楽しんでいるふうな表情というわけではないが、興味がまるでないわけでもない感じの穏やかな顔つきは、先ほどと変わらない。いつもあんなふうになんかちょうどよい分量の余裕をたたえて生きているのだろうか。彼が本来持っているであろう野性味は隠し込まれている気がするがしかしそれは彼の意図してやったことだと思える。彼はなににも焦っていないし、すべてを楽しみながら生きている。あんなふうになんか自信に満ちた人間と人生をともにするというのはいったいどんな心地がするものだろうか。先ほどさりげなく指を見たら結婚指輪はしていないようだった。だからといって独身だとは決められないだろうが、でも指輪をしている人にみとれるよりはわたしの気持ちが軽いような気がした。

わたしはどうしてももっと彼に近づきたかった。決して彼の視界に簡単に入らないように人の後ろをかき分けて、彼の背後に回りこもうとする。

ゴスペルが終わって盛大な拍手。彼もまた手を叩いていた。

拍手で一瞬沸きたち生じた、場の真空めいたものを利用してわたしはずかずかと人垣をふたつ通り越して、ちょうど彼の背面に回ることに成功する。

もう今では彼の真後ろの列にいる。

少し経って彼の真後ろの人間がちょうど席を立てってしまったすきにその席にも移動した。

今や完全に彼の背後にわたしは立っていた。

つづく。

今や完全に彼の真後ろにいるわたしは自分を怖いもの知らずだとはあまり考えなかった。もし彼が振り返ってわたしの姿を認めたら不審に思うのではないかという心配はあまりなかった。そもそも空港内で働くスタッフなのだから休憩時間に式典を見学していることだってありうる。

でもわたしはそんな言い訳なんて用意しないでもいいことも知っていた。

たとえ彼が振り向いても、わたしには気がつかないのではないか。

先ほどの店員がこんなところにまさかいるはずがないというのではない。

わたしのような平凡な女性はどこにだっている。こんな平凡な女性の顔立ちを細かく彼が記憶しているとは思えない。もしわたしが、彼がいつも利用している国際線のキャビンアテンダントで、目の覚めるような美人だったとすれば、あるいは彼は、おや、こんな場所でお会いしましたね、というようなことになるかもしれない。

でもわたしに限ってはそんなことは起こらない。風景の一部として見過ごされて彼が特にわたしに注目することはないだろう。

でもそういうわたしだからここまで大胆な行動がとれたのだと思う。

よく映画のスパイや探偵は絶世の美女ということになっているが、そんな目立つ容貌の女性が誰かを尾行したりすればたちまちばれてしまうだろう。

探偵はわたしのように風景に同化してしまうような女が一番向いているのではないだろうか。そして彼が結局振り向くこともない気がしている。

振り向けば後ろの列の人間と至近距離で目が合ってしまう可能性があるのでたいていの人間はそんなことはしないものだ。

わたしはセレモニーをもっとよく見ようとしている人のごとくに前方ににじり出る。彼のスーツのジャケットの、ちょうど僧帽筋の盛り上がりのあたりにわたしの顔があった。彼の体臭ともコロンともつかないような匂いが一瞬漂った気がする。いや、これは先ほど彼がまもってきた深夜の雨の匂いの名残だろうか。

そしてずっと視線をずらすと、

彼のスマートフォンの画面が目に入る。

そう、わたしはこれを覗きたかったのだ。

一瞬が勝負だと思っていた。目に力を入れた。

スマートフォンのディスプレイには、ツイッターのタイムラインが表示されていた。

そしてホーム画面の一番上のバーに白抜きで浮かびかがる、英数字からなる文字列をわたしは盗み見る。

意味のある単語だったせいで、わたしはそれを一瞬で記憶した。

その瞬間わたしは身を翻すようにしてその場を離れる。

あっという間にざわめきは背後の遠いものとなる。

念のため、自分の会社の店舗に顔を出す。毎日出勤したら必ず顔は出していたが、ここへは昨晚来ていたので今日はそのまま帰宅するつもりだったのだ。

こちらも早番の二人に交代している。

わたしは何事もなかったかのようにカウンターのストローやミルクや砂糖をさしてあるラックをチェックしたり、冷蔵庫の中身を確認するようなことをやって、さもこれが目的だった顔で早番のアルバイトの女の子になにかかわったことはないかななどを尋ねて店もあとにした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

帰宅する電車で飛び乗ってしばらくわたしは怖くて自分のスマートフォンを眺めることはできなかった。

ツイッターをわたしはかなり頻繁に利用しているほうだった。でも彼がまさかあの場で本当にツイッターを使っているとは。そうあったらいいなと考えたことは確かだった。

さいとうかつとしという本名とは結びつかないようなアカウント名だったので、あれは完全にプライベートなアカウントなのだろうか。

とにかくしばらくしないとツイッターにアクセスする気にはなれなかった。

うまく行き過ぎた気もするし、ツイッターのアカウントを盗み見たくらいで、彼に近づけたと思うのは馬鹿げているとも思えた。

とにかく少し眠ろう。今日は夕方本社に出勤して少し事務的な仕事をするつもりでいたが、それは急ぐ仕事ではない。明日はオフで、あさっては本社で会議に出た後、また夜から店に出る。

今は少し休まなくては。

JR大崎駅に着くと、

しかし今度はわたしのことをそこで待ち構えている人間がいた。

改札の前に立ち、わたしのことを認めるとぎこちない笑顔を向けてきた。

瀬川である。

☆☆☆☆

つづく

「やあ」

瀬川がゆらりとこちらに近づいてくる。

「昨日の夕方、君が出勤していくのがたまたま見えたんだ。だからきっとこのくらいの時間に帰ってくるんだろうと思って待っていたんだ」

6時台の大崎駅は人が増え始めているが、待ち構えている人物が改札を通過するのを見落とすほどひどい混雑ではない。それにしてもここに立っていればわたしがやってくると思ってずっと立っていたことを思うとわたしは少し腹立たしい気持ちになる。

出勤していくのがたまたま見えたというのもどうなんだろうか。今日が日曜で昨日は土曜だったので確かに彼は夕方自宅マンションにいてもおかしくないのだが。

彼は大崎駅のすぐ近くのタワーマンションの高層階に棲んでいる。わたしはマンションとマンションの谷間の、狭くて買収されないままになった土地に残った古いアパートに大学時代から棲み続けていて、確かに瀬川の家窓から見下ろせばわたしのアパートのドアの開け閉めだって確認できた。大学に入った頃は板橋区にある学生寮に棲んでいた。羽田空港でのバイトを始めて、板橋区からだと始発に乗っても早番に間に合わなかったため品川区のこのアパートに引っ越した20年近く前、大崎駅には瀬川の棲むようなタワーマンションみたいなものは建っておらず、山手線の駅の中でももっとも存在感の薄い地味な駅だった。

「良かったら朝食を一緒にどう？ごちそうするよ」

瀬川がそうやって駅構内にあるカフェを指差す。

「ごめんなさい。今日はとても疲れてて朝ご飯を食べる気分じゃないの」

わたしは瀬川を刺激しないように丁寧な言葉遣いをする。最近わたしに執拗につきまとうようになってきて少し身の危険を感じるようになっていた。怒りをあらわにしたほうがいいのかとも思ったが、そもそも瀬川はわたしの上に立っているというプライドがあり、それを少しでも崩すようなことがあればどういう具合にキレてしまうのか、それが怖い。

瀬川は普通の女性には相手にされないと思っている。髪を巻いて流行のファッションに身を包み、ハイヒールをはいて、ネイルサロンに通っているよう世の中の多くの女性だ。彼は今まで、女性あつかいされてこなかったような女性ばかりをおいかけてきた。そんな彼にすらわたしは標的にされなかったらしく、知り合った頃、そういう今までの恋愛経験も包み隠さず教えてくれたくらいだ。それが去年の夏、一人の女性に手痛い失恋をしたとかでよりハードルを上げて、さらに手近にいるわたしな

らば、と思い始めたらしい。

そもそも瀬川からの不在着信が目立つようになったと感じ始めて携帯の電源を切っておくことが増えた。

いかにも彼のせいでそういうことをするはめになったと感じさせなくて済んだのは、わたしがほとんど普段誰からも電話やメールが来ることはない人間だったおかげかもしれない。

瀬川から電源をよく切っていることを指摘され、それはずっと昔からの習慣なのだと答えた際、あまり不審に思われなかったようだ。

確かに普段わたしには誰からも連絡がこない。会社からは仕事専用の携帯が支給されていたので不便もなかった。

しかしそうなると瀬川はこんなふうにごくどこかで待ち伏せたり、部屋の窓からわたしが外出するのが見えたらすぐに自分も外に出て追いかけてくるようになった。

この辺、本当はプライドが高いのか低いのかよくわからない行動だと思うが、目的を達成するまで手段を選ばない幼稚さはいかにも彼らしいとも思う。

「ごめんなさい。本当に本当に今日は疲れているんだ」

わたしが絞り出すような声を出すと、さすがに諦めたらしく、ならば途中まで一緒に歩こうと横についてきた。

こんなふうになるまでわたしは瀬川をあまり邪険にすることもなかったことをふいに思い出した。インターネットのオフ会の場所で居合わせて、たまたま最寄り駅が同じだったので、ほどほどに連絡をとりあってきた。彼の広いマンションのリビングでオフ会が開かれたときも参加したことがあって、そのときにわたしは自宅のアパートが彼の部屋から丸見えなことに気がついたのだった。

駅を出て歩いていると、瀬川が立ち止まって自動販売機で飲み物を買った。一応立ち止まって待っていると、2本買った缶コーヒーの一本をわたしに手渡してくれた。

瀬川、あなたはわたしに恋愛感情を抱いているわけじゃないんでしょ？たまたま誰にも相手にされない時期に、もっとも女性としてランクの低いわたしならば手に入るのではないかという錯覚によって一時の気の迷いを起こしているんでしょ？何度かそういうことを遠回しに聞いたこともあったが認めようとしなかった。

早くそのことを認めて以前のように瀬川がまた別の女の子を追いかけてまわしてくれると助かるなあと思った。待ち伏せされたとき一瞬心がすごくこわばったが、そういえばわたしたちはそれほど悪くない関係だったはずだ。インターネットでなら口を聞く相手はあったが、リアルのわたしに時々でも連絡をくれたのはここ最近では瀬川だけだった。

先に彼のマンションのエントランスにさしかかる。

「じゃあここで」

瀬川は「また連絡する」と言い残してエントランスに消えていった。解錠したときに鳴る電子音がぴーっと響くのを聞きながらわたしは、そのマンションの裏手の、古い住宅と半分は墓地である地域に回った。そもそも墓地に面しているのだから、借りた当時から家賃がとても安かったのだ。それから更新を幾度も経たが、山手線の駅から徒歩3分だとは考えられないような値段のままだった。

つづく

部屋に入ると、瀬川のことで一瞬忘れていた、「彼」のこと、そして盗み見たtwitterアカウントのことを思い出した。彼はおそらくロンドンへの便かニューヨークへの便に乗ったはずだ。どちらに乗ったのか確かめなかったが、あのアカウントにアクセスすれば、もしかすればわかるかもしれない。いや、目的地だけでない、ほかの様々な彼に関する情報が手に入る可能性がある。

しかし彼は今飛行機に乗ったばかりだ。

目的地に到着するにはあと半日かかるはずだ。

わたしはまだインターネットにアクセスする気になれず、

コートを脱いで部屋着に着替えるとそのままベッドに倒れ込んだ。どうせすぐに寝てしまうのだからエアコンをつけるのももったいない気がした。自分でもなぜこんなに節約してしまうのかよくわからないが、わたしは無駄なお金を使うことが嫌いだった。一円一円溜め込んだお金でいつかなにか大きな買い物をしたいと考えているわけではない。

将来が不安だからだと公言して吝嗇家を通してているが、実はさほど将来が不安なわけでもない。食べられなくなったら、なんとなくそのまま空気に溶けるみたいにして消えてなくなればいいと思っている。

この部屋には陽の光は差し込まない。24時間のうち、一分だって一秒だって差し込まない。朝陽がわずかな時間だけ入ることもあった。でもそれはここに入居した最初の2年だけだったと記憶する。

年に2度、春分の日と秋分の日にだけファラオの財宝を示す一条の光が奇跡的に差し込むという、エジプトの古代人が計算を尽くした墓の中の仕掛けのように、この部屋にも1年に一瞬だけでも光の入ることがあるのかもしれないが、わたしはそれをこの10年以上目撃してなかった。

周囲にぼこぼこ建設されたタワーマンションに住む人々は、この忘れられた土地についてどう思っているのだろうか。墓は気味が悪いし、家屋はほとんどが古いものばかりで、近代的なマンション群の景観を損ねるとでも思われているかもしれない。この中途半端な一角も、いずれ駐車場にするとかなんとかで買収されてしまうのかもしれない。それならそうなのだ。そのときにはここを立ち退くだけの話だ。でも今は引っ越しをする手間や金銭ももったいないから棲み続けている。羽田にアクセスがよければどこに棲んでもわたしには同じことだ。大学時代には大学にも一応通うために大崎を選んだが、今だったら空港のすぐそばに棲んだって構わない。

ベッドの中に、スマートフォンは握りしめて持ってきていた。

案外眠りは簡単に訪れなかった。

「彼」を探し出そうか、どうしようか。

一応罪悪感はある。しかしわたしが彼のつぶやきを読んだからといって、それがそれほど悪いことだとは思えなかった。ただ読むだけだ。それ以上接近するつもりは毛頭ない。また店に来てくれるといいなとは思いますが、店員として接する以上のことをすることはないだろう。そして彼の方もわたしに個人的に関心を持つことは永遠にないだろう。

「彼」のタイムラインをしてみるかどうかは決めかねたまま、結局わたしはtwitterにアクセスした。

布団の中で眠りに落ちるまでインターネットにアクセスすることはよくやることで、たいてい目が覚めるとベッドの上に携帯電話が手から滑り落ちて転がっている。いったいなにを最後に読んでいて眠りに落ちたのか記憶は眠りに奪われて、どこかで夢に巻き込まれているのかもしれない。スマートフォンを覗き、最後に見ていたらしい画面がそのまま保存されているのを眺めてもそんな箇所を読んでいた記憶が皆無のこともよくあった。

わたしはネットではほどほどに社交的だが、それにしたって有名人でもないのにかなりの数のフォロー、フォロワーがいた。

というのも、このサービスを開始してしばらくは、誰にリムーブされたかということでもいちいち落ち込んだりしてしまい楽しめていなかった。それまで楽しんできたSNSの世界では、予告もなくつながりを断たれること滅多になかったからだ。

それでストレスなく楽しむにはどうしたらよいかいろいろな人の方法を検索して読んでみて、フォロワーが減ったかどうか気にならないくらいに一度増やしてみればいいというアドバイスを目にした。フォロワーを増やすには自分のフォローをどんどん増やすというシンプルな方法が紹介されていた。

それに、twitterはそもそも密室で限定された人間関係のやりとりをするよりも、無限に拡散されていくような情報空間の広がりを楽しむのが醍醐味だから、ざーっと文字列が流れていくグルーブ感を醸すほどの数をフォローしないと本当の魅力はわからないと書いている人もいた。

半信半疑ながら、しばらくフォローを増やすことに専念した。とはいえあまりにも無作為にフォローするのもひんしゅくを買う。なるべく興味のある言葉を検索してそれにひっかかる人だけを選んでフォローした。その結果、常に自分がフォローしただけ、着々とフォロワーが増えていった。フォロワーを増やすのだけが目的の人間はお断り！とあからさまに文句を言われたこともあったが、それぞれの楽しみ方でいいのではないかという考えが主流らしいこのサービスでは、文句を言う人とはもめ事に発展するわけでもなくそれっきり関わることはないし、そのうちその言葉に傷つくこともなくなり、わたしは淡々と作業を進めた。

その結果、たくさんのフォロー、フォロワーができた。確かに毎秒ごとにタイムラインに膨大な文字が生まれていく波は心地よかった。全員のツイートを必ずしも全部拾

えるわけじゃない。でも少数でやっているときだって全員の全部のツイートを読むことは無理だと思っていた。だったら、多少規模を大きくして、このうねりを体感していたほうがわたしは良かった。

瀬川もこの文字のうねりの中に含まれていた一人だった。

瀬川とわたしが居合わせたオフ会というのは航空ファンの集いだ。羽田で暇さえあれば飛行機の写真を撮っているというマニアックな人も入れば、丘マイルをためて沢山飛行機に乗ることに情熱を傾ける人、あるいは単純に旅行が好きだという程度の人も含まれていた。

その中で、実物のキャビンアテンダントに会えるんじゃないかという期待を持っていたのが瀬川だった。現実の恋愛では決して相手にしてもらえない高嶺の花と、せめて飲み会の席で言葉を交わせたらいいと。初めて会ったとき、いかにもオタク風情な瀬川がその夢をわたしに語ってくれたとき、わりと共感した。なにも恋人になりたいわけじゃない。少しだけ会話をして同じ空気を吸ってみたいんだという密やかで控えめな欲望。それはわたしが持っているものとよく似ている気がしたのだ。

結局そのオフ会には本物のキャビンアテンダントはおらず、瀬川の夢はかなわなかった。しかし、ほどほどにかわいい女の子数人と連絡先を交換できたと嬉しそうに話していた。その中の一人のデパートガールの女の子とつきあい始めたと喜んでいて。わたしといえばオフ会でも出会いを求めるようなことはなかった。ただ、電子空間の中で、会話を共有した人々と、実際にその会話の続きをもっとつっこんでできたら楽しいだろうと思って参加しただけだ。でも瀬川をはじめ、時々集まってご飯を食べようという似たような年代のグループができて、わたしはそれを楽しんでいたように思う。

わたしはタイムラインを眺める。よく会話をするメンバーだけを集めたりリストも作ったが、基本的にフォローしている全員のタイムラインを眺めることにしている。たまたまtwitterにアクセスしている時間の間しか読めないだろうが、それでも大きな集団の「そのときの今」を読めるほうがtwitterを体感できると思っている。

しかし今日のわたしの頭にはどのツイートも響かない。乾いて味気ない文字の連なりにしか見えない。

そう。ちっとも悪いことではないではないか。

どこが悪いのか。

親しい友人のtwitterアカウントをこっそり調べたりすれば罪悪感を感じるが、わたしは「彼」にとって何者でもない。

そのわたしが密かにツイートを讀んだところで彼にはなんの不利益も生じないのだ。わたしは気がつく、頭の中で繰り返し唱えていたその強引な理論をもう一度組み立てていた。

もし「悪いこと」だとしても、わたしは、もう覗くのを止めることはできないでしょう？

そしてわたしは「彼」のタイムラインにアクセスした。

黒っぽい抽象画のようなアイコン。目を凝らしてみるがそれがなにを表現しているのかわからなかった。あるいはなにも表現などしていないただの色の濃淡なのかもしれない。光と影を撮った写真であるのかもしれない。

プロフィールの文字列を讀もうとしたとき、スマートフォンのディスプレイにメンションが届いたという表示がかぶさった。瀬川のアカウントからだ。

「今朝は羽田空港でNY便とロンドン便が就航したセレモニーがあったと今、ニュースでやっています。そのときのテレビ映像に君が写っていました」

ギョツとした。確かにテレビカメラが沢山いたが、わたしのような人間が顔のわかるほど鮮明にうつってしまうという可能性についてまったく思い至らなかった。

朝の時間帯は同じ映像を繰り返し使うので、またそれが流れることもある。

わたしはベッドから跳ね起きてテレビのスイッチを入れた。

瀬川にすぐに気づいてもらえるようにやはりツイッターを使って「どこの局のニュースですか」と尋ねると返事が返ってくる。

その局をしばらく見ていると、朝の短い情報番組が終わって、次の番組に変わり、再

び羽田空港のニュースが現れた。

ニュースの中盤、いきなりズームアップされた「彼」の顔がうつった。

彼は一般の乗客たちの座るベンチでは最前列にいた。しかしベンチは会場を取り囲むようにしてあったので彼が特別に目立つ席にいたわけではない。それにしても彼ひとりがこんなにズームされるなんて。と、次の瞬間、その映像がいきなり引き気味になり、「彼」の後ろにわたしの顔が映ったのだ。もともと彼の顔がかなりのズームだったせいで、後ろから覗き込む形になっているわたしの顔も鮮明に映っていた。

またすぐ別の映像に切り替わる。

このニュースを見て、あれがわたしだと気づく人間はどのくらいいるのだろう。

瀬川だから気づいたのか。

例えば会社の上司が見たらわたしだと気づくのだろうか。

そして「彼」がこのニュースを見てしまう可能性はあるのか。NYでも日本のテレビ番組は視聴できるのだろうか。

わたしは思いもよらぬ事態に息ができないくらい苦しさを覚えた。

わたしはテレビのスイッチを切ったため息をつき、落ち着くためになにか温かいものを飲むことを思いつく。

ケトルに水を汲んで火にかけて、なにを飲もうか考えた。

そしてほんの4, 5時間前に「彼」にコーヒーを淹れたことを思い出して、あのときは本当に幸せだったとしみじみ思った。

日々数えきれないくらいコーヒーを客に入れてだしている。

自宅で自分のためにも一杯か二杯淹れる。

誰かのためにコーヒーを淹れて幸せを感じるというのは生まれてはじめての経験だった。

「彼」がコーヒーを飲んでいたところを思い出しながら、わたしは自分のためにコーヒーを淹れた。

彼はコーヒーがすっかり冷めてしまうほど長居することもなく、ちょうどコーヒーが本来の美味しさを保っている間にそれをすっかり飲み干した。ミルクも砂糖も入れなかったと思う。

味のないなにかを流しこむような無粋な飲み方でもなく、かといってわざとらしいくらいに味わうでもなく、

まっとうに当たり前前にコーヒーを楽しんでいた。

その様子をそっと眺めているだけで、本当に胸が苦しいくらい幸せだと思った。

彼のためにまたコーヒーを淹れることができたらどんなにいいだろうか。

彼にとってわたしが特別な人間にならなくてもいい。

ひっそりと匿名のわたしのまま、毎日、毎朝、彼にコーヒーを就くって手渡すことができたなら。

そしてわたしはあの店で店員をやっている限りはそのチャンスは時々訪れることを思い出す。

しかし、もし彼があのニュース映像を見て、真後ろから不自然くらい顔を近づけている女性がいることに気づき、それがコーヒースタンドの店員だと気づいたら。もしかすると気味が悪くなってもう二度とわたしの店には立ち寄ってくれなくなるかもしれない。

それを思うと暗澹たる気分になる。

なんと愚かなことをしてしまったのか。

でも「彼」があんなにアップになって映ったのはただの偶然なのだろうか。キャプシ

ヨンもナレーションも彼が誰だとは告げていなかったが、ただの観衆をあんなふう
にアップで映すものなのか、普段それほど熱心にテレビを見ないせいでわたしには判
断がつかなかった。

そして普通の人には彼のすっきりと整ったハンサムな顔立ちに目を奪われて、うしろに
写りこんでしかも途中で見切れいているわたしには目がいかないのではないかという
考えに落ち着き、少し冷静さを取り戻した。

わたしは作りたてのコーヒーと、トーストをトレイに載せてまたベッドに戻った。
もそもそとトーストを食べながらコーヒーを飲む。

ベッドは道に面した窓に寄せてあるが、カーテンはいつもしっかり閉ざしている。ふ
とカーテンを少しだけひらいてみる。瀬川の棲んでいるタワーマンションの根本のほ
うと、狭いけれど手入れの行き届いた庭、道路と庭を区切るフェンスが見えた。道路
は狭くて車は一台入るのがやっとで、普段はこのあたりの住人が通るくらいだった。
自分の部屋の窓からは顔を出すようにして見上げないと瀬川の棲んでいる階の窓もバ
ルコニーも見えない。しかし上から見下ろすぶんにはこの狭い道とわたしの住むアパ
ートがすっきり見渡せる。わたしがアパートを出るところはずっと見張っていたとす
ればちゃんと分かるだろう。

瀬川は土日が休日のはずだった。あのまま部屋にいるのだろうか。

しかし瀬川がずっとわたしの部屋の窓を観察しているとはどうしても考えられない。
わたしは誰かから執着されるような人間ではない。そのような魅力はどこにも兼ね備
えていない。例えば恨みをかって執着されるようなことはあっても、恋愛感情を募ら
せるような対象ではありえない。

彼は自室に戻ったら戻ったで、手に入らない高嶺の花の女性について考えているので
はないか。ネットを使ってそのような女性と会話しようとしているかもしれないし、
実際にそうしているのかもしれない。そして外に出たときだけ、リアルの世界では、
わたしに気のあるそぶりをしているのでは？

どっちにしてもわたしは瀬川と恋愛関係になるつもりはなかった。

つづく

カーテンを閉じるとわたしはおそるおそる再びスマートフォンを手にした。

今度こそ「彼」のタイムラインを読むつもりだった。

さきほど不思議に眺めたモノトーンのアイコンは、やはりなにかを具象するものではないらしく、それがなんなのか答えを出すことを諦める。そしてすぐにツイートの連なりのほうへ目をやる。

彼のツイートのほとんどは英語で書かれていた。英語が母国語なのだろうか。

しかし時々日本語が混じっている。混じっている日本語のほとんどは日本語でメンションを飛ばしてきた人への答えであり、基本的には英語を使っているらしかった。

普段のつぶやきをしばらくさかのぼったところ、生活の拠点は東京にあるらしい。仕事のために頻繁にNYに訪れていて、今回の目的地もNYだから羽田から直行便が飛び始めたことを喜ぶツイートがある。

しかしツイートの中にはフィクションなのかなんなのか判断のつかないものがいくつか並んでいる。

わたしは頭の中でそれを意識しつつ読んでいく。

「マンハッタンのいずこかの高層ビルの高層階にあるという朝風呂倶楽部の存在はついに実在のものとして僕にその証拠を見せ始めている」

朝風呂倶楽部？

なんじゃそりゃ。わたしは首を傾げる。

「世界各国の要人・紳士たちが専用ジェットで乗り付けることもあるというその秘密倶楽部の噂が途絶えることはなかったが、これまで厚い霧の向こうに姿を隠してきた」

朝風呂倶楽部のツイートはこのほかにも散見された。

アメリカのティーパーティー運動と呼ばれる、実際にはお茶会ではない政治運動のように、実際には朝風呂に入ることではない、なにかの組織、あるいはその活動のことをこのように呼んでいるのだろうか。

それともこれらはすべて彼の創作で、ほんの軽い気持ちで書いているポエムのようなものなのだろうか。

昨夜、羽田に到着する直前、タクシーの中から送信したと思われるツイートもあった。

「紀尾井町のニューオータニからタクシーに乗る。雨は濃く降り込めている。機内で読むつもりでAtsuko Sugaをどれにするか迷ったが、全集の2巻にした」

Atsuko Sugaが日本の作家の、しかもわたしもよく読む随筆家の名前だと気がつくまでしばらくかかった。

つづく

わたしはそのまま「彼」のツイートを読み続ける。

もはやコーヒーを飲むこともパンを食べることもどうでもよくなって。

陽のあたらない暗い部屋は寒いままだが、わたしは興奮しているせいか寒さが苦痛ではなく、今やもう毛布もかぶっていない。

「彼」のツイートは、客観的に考えても、読み応えがあるものが多かった。物語性に富んでいるというのか、わたしはもし彼のことを実際に知らなくてこのツイートだけを最初に読んだとしても惹き込まれてしまったのではないかと思った。

なんの仕事をしているのかはぼかされていたが、アメリカのビジネスマンとの付き合いに関する記述を読むと、かなり上流社会に属する人間と普段接しているようだ。日本で出入りしている店も、高級で敷居の高い店が多いように思う。しかしそれを特にひけらかして自慢するような態度ではない。ツイートを追っていると、ほどほどに俗っぽい部分もあるが憎めない、30代後半の感じのいい男性が主人公の上質な小説を読んでいるような気分になる。彼は精神が安定していて、穏やかな大人の男性だと思われた。

時々差し込まれる「朝風呂倶楽部」についての記述はやはりよくわからないままだったが、わたしは「彼」のツイートを読むことに深い満足感を覚えた。

次にJFK空港に到着したら、どんな言葉を紡いでくれるのか。

いかげん目がチカチカして頭痛を伴うくらいになってようやくスマートフォンから離れる気になる。

いつのまにか昼近い。今日の昼から明日の夜の出勤までオフになっている。責任者になってからオフの時間もなんだかんだで本社か店舗のほうに出ていた。年末年始などはほとんど帰宅しないで空港の中にいたという激務だった。

しかしそれほど苦痛というわけではなかった。

空港にいらればわたしは穏やかな気持でいられた。

孤独は純粋な濃度と硬度でわたしに守られた。

ひと眠りしたら、本社に顔を出しにいった、また羽田にいこう。

わたしは久しぶりに安らかに眠りをひきよせることができた。

つづく

夢を見ている。

上空25000フィートの高さでわたしは夢を見ている。

空気が薄いせいなのか高速で移動しているせいなのかぼおっとする。いやそもそも夢とはぼおっとしてしまうものなのかもしれない。

千島列島を越え、アリューシャン列島を越え、アラスカ上空、カナダ上空を飛んでゆく。目指しているのは、北米の、あの、ひととき強く輝く都市だろうか。

わたしは鳥になったのか。

ぐんぐんぐんぐん地球に吹く風がわたしを運んでくれる。

バイオレットの海面が、表面張力のような緊張感をたたえて、今にも爆発しそうだ。深海から運ばれる水にためられた太古の記憶が宇宙と手をつなぐための爆発。

今、水柱が海面からあがった。

天と海の握手。

水飛沫が激しくわたしの頬を打つ。

つめたくて気持ちがいい。

雫のひとつひとつが、記憶を内包して、それをガラス玉の輝きの中に映し出している。

わたしは夢中でむさぼるように億千の水の玉の中を覗き込む。

覗き込みながらその水を飲んでいる。清冽な水がわたしを満たしてゆく。

☆☆☆☆☆☆☆☆

眠りが唐突に終わってわたしは出勤するためにアパートを出る。

店舗に立つときは白のワイシャツに黒のパンツ、それにギャルソンエプロンを巻く。エプロンは会社から店員に貸与されるが、白いシャツと黒のパンツは自前のものを使う。

わたしは本社に事務仕事に行く際にでも、いつ店に立つことになってもいいようにやはり白いシャツと黒いパンツをはいていた。

会社のロッカーにも予備の白いシャツと黒いパンツを置いている。

そういえば、わたしがこれ以外の服装をしているのを見たことがないような気がする

、と瀬川に言われたこともある。

そんなことはない。当然、他の服を着ていることもある。

どんな服を着てもわたしの印象はいつもたいして変わらないということだろう。

アイロンをかけておいた新しい白いシャツに、黒いパンツ、その上に黒のコートを羽織る。

午後の空気は曖昧な気温になっていた。

アパートの階段を降りて道路に出たところで瀬川のマンションの部屋を見上げた。

カーテンは引かれていないが、ガラスの向こうは暗くて見えない。もし瀬川がこちらを見ていてもはっきりと顔は判らないのではないかと思う。

わたしはまず、国際ターミナルのひとつ手前の駅、天空橋の本社に向かった。



*この小説はこれが15ページ目になります。
一番最初から読むときは、[こちら](#)からどうぞ～。

本社のビルは焦げ茶色のレンガが外壁を飾る凝った造りで、建築マニアが時々見学にきているほど有名らしかった。

くだんの、最近会長職に舞い戻った創始者が戦後、商売が軌道に乗り始めてから自社ビルとして建てたものだから、実際にはそれほど古いものではない。

わたしもやはりこの建物を訪れることが好きだった。バイトからそのまま社員として就職することを決めたのは、空港が好きだったことに加えて、この会社の、この建物に象徴される社風みたいなものに惹かれていたからだ。襟を正したくなる空気の中にもくつろぎを感じることができる。

苔むした古くて清らかな寺社のような雰囲気、建物と、のみならず会社全体がまとまっているような気がするのはいまも変わっていなかった。



自分のデスクに行くと、マネージャーの単塚さんがこっちに向かってくる。

「昨晚はごめんなさい。寝てしまっていて留守電を聞いたのが今朝になってからの」

一人足りないのでなんとかしてほしいことを留守電に入れ、しかし結局単塚さんから昨日はなんの連絡もこなかった。

しかし、一人でもなんとかあったということ朝、やはり留守電に報告してあった。

「大丈夫でしたよ。ロンドン便とニューヨーク便が就航したっていうのうちの店に客が増えなかったのは残念だったと言えるかもしれませんが」

わたしはそう返事をする。

「そうよね。とにかく本当に迷惑をかけたわ。ごめんなさい」

と、単塚さんはフロアを出て行ってしまった。

なんだか単塚さんは誰も寄せ付けないようなピリピリしたものを発していて、つい気後れして大丈夫ですかと声をかけそびれた。

どこか体調でもわるいのだろうか、顔色が良くなかったし足取りもおかしかった。第一新しい就航便があるというのに事前に単塚さんはなにもわたしに言ってきてなかった。



新しい便が就航したりすれば、店としてなにかマーケティングを行って客を集めようとするのは、単塚さんの仕事で、しかも彼女の得意分野のはずだった。

わたしは店での実際の業務や従業員たちのシフトの管理に忙しくてそこまでは手がまわらないし、もともと告代理店でキャリアを積んできた単塚さんにすべてを任せることにしていた。また、単塚さんはそのために3年前に中途採用されてマネージャー職に就いたのだ。

だから、空港で見知らぬ男性の会話から就航便のことを知って意外に思った。昨夜電話で捕まらなかったことも普段はあまりないことで、ましてや朝、わたしの留守電に気づいた時点で折返し電話もしてこなかったことも単塚さんのこれまでの仕事ぶりからすると考えられない。なんというか仕事に情熱を傾けすぎなのではないかと心配になるくらいの人だったのだ。

「単塚さん、どうかしたのでしょいかね」

他にフロアには古参の社員で經理の酒井さんしかいなかったので酒井さんに向かって言ったつもりだった。

「彼女、どうもプライベートでなにかよくない事態にあるらしいのよね」

と、背後から酒井さんの代わりに声がした。

五箇山さんという、酒井さんと同じく古参社員だ。五箇山さんと酒井さんはともに50代の女性だった。

「ああ、プライベート？なにかしら」

酒井さんがねっとりとした声を出す。学生時代のアルバイトの頃からお世話になっているこの二人について悪く言いたくはなかったが、社内の人間について、おもしろお

かしく噂話を流すのはだいたい彼女たちの役目だった。そしてわたし自身もなにを言われているのかわかったものではないと思っている。

噂をばら撒くことに加担したくはなかったので、わたしもやはりフロアを出ることにした。

すりガラスのに入った古めかしい扉を閉めると、今出てきた部屋の中で、酒井さんの「やだーっ、ほんとに？」という甲高い声が聞こえた。



つづく。。今回から小説の方にも挿絵的に写真をいれました。というのも文字ばかり連なっていると読むのが面倒になるという私自身の問題によるものです。むかーしの携帯写真から少しずつ貼りつけていこうと思います。話の筋にはなんにも関係ないんですが。



会社の自分のデスクのあるフロアに居づらくなって出てきたはいいけれども、どこか他にいくあてがあったわけではない。いくつかの事務的な仕事を片付ける予定も狂ってしまいそうだった。わたしは結局、社屋の屋上に登ることにした。

エレベーターで誰かに会って最上階までのボタンを押したりすれば、なんの用でそこに行くのか不審に思われるかもしれない。屋上に出ることは禁止されているわけではないが、わたしは階段を使って屋上にいくことにした。

きっと寒いだろうと思ってドアを開けると、意外にもぬくもりを感じる光が眩しくて目を細めることになった。

そうだ、2月ももうすぐ終わる。

春が近付いているのだ。



「彼」のまってきた雨の匂いを嗅いだとき、特別な気持ちがあったのは、冷たい雨の中にも春の土や植物の生温かいような気配が含まれていたからなのではないだろうか、ととってつけるよう

にわたしは考えてみる。

一瞬でのぼせあがるように、気持ちを絡め取られてしまった。

逃れようがなかった。これが恋というものなら、それは幾分暴力的で図々しく、手には負えない厄介さを感じてしまう。

これまでのわたしは、少しでも感じのよい異性に会うと、この人に親しみを感じてもよいものだろうか、好感をいだいては迷惑ではないだろうかと立ち止まる。いつもたいてい、そこより先には進まなかった。

でも今回は立ち止まることも忘れていた。気がついたらもう走りだしていた。ほとんど暴走とも言える。このような衝動性はとても危険で忌まわしいものだと思ってきた。

しかし、これまでの反動のように、相手の携帯電話の中の情報を盗みみるという行動にまで走ってしまったというのが、自分で恐ろしくもあった。

屋上に歩み出してしまうと、まだ冷たい風が襟元にすべりこんできて、縮み上がる。

でもやはり春の気配は確かにあった。

「JFK就航便のセレモニーは盛大でしたね」

いきなり声がして驚く。

屋上に置いてある、半分朽ちたようなベンチに、

90歳を目前にして現役に復帰した我社の会長が座ってわたしのほうを見ていた。





これまで、昨年の復帰就任の挨拶の際に実物を見たくらいで、あとは社内報などの印刷物の写真でしか会長の顔は知らなかった。顔といっても、なにしろ90歳目前の老人なので、個人の特徴を把握する前に、「老人である」という印象を強く受け取ってしまい、細かい顔の造作などに特に注意を払ったこともない。

それでも話しかけられてそれがすぐに会長であることは分かった。

やはりまずは圧倒的な「歳を取った老人」であるという印象が伝わってきたが、それだけでなく、皺の中に埋もれたような細い目からひっそりとではあったが知的な輝きが漏れでていて、ただの隠居した穏やかな老人とは一線を画す、静かな迫力となっていた。

就業時間内、といってもわたしは主にずっと現場に立ってきた人間だから、屋上でぶらぶらしているからといって仕事をさぼっているという後ろめたさはなかった。第一、今日出社したのは完全にサービス残業の範疇だ。



「羽田のJFK就航便、記念セレモニーは盛大でしたね」

確かに会長はわたしにそう言った。会長はわたしが誰であるのか把握して言葉をかけているのか、どの社員と会っても同じようにそう話しかけたのか、わたしにはそれが判断つかずに返事につまっていた。しかし会長のほうからもう次の言葉が期待できそうにもないと判断して、

「国際ターミナル事業の責任者として、これからはますます仕事に力を入れていきたいと考えています」

と、自分の立場を明らかにするような返事をした。

「頼もしい限りだ。さて、君に頼みたい仕事があってここへ来た」

「はい」



「明日の朝の羽田発、JFK空港直行便でNYに飛んでもらいたい」

一瞬、なにを言われたのか理解できなかった。空気の薄い高山で、酸素の足りない脳がもがくようにして、他の情報をどうにか引き出さなくては、と思うが、言葉が出てこない。

「でもわたしの通常の業務は・・・」

「それは心配しなくてもいい」

「でもわたしがNYにいったらなにをすれば・・・」

「今は詳しく説明している時間がない。追って連絡をするのでとりあえず君には出発の準備をしてほしい。航空券の手配は済んでいる。これからすぐに総務の林くんのところに行って航空券を受け取り、出発の準備を」

会長の声はあくまで優しくてやわらかい。

「さあ、行きなさい。時間がない。早く」

そう言われて、わたしは弾かれるように屋上をあとにした。



おそろおそろ総務課のドアを開ける。

林さんはアルバイト時代からなにかと顔を合わせてきたのでよく知っている人といえそうだが、しかし個人的な話をしたこともない。

50代半ばになろうという男性で、つまりアルバイトを始めたばかりの頃は30代前半だったということだが、朴訥そうな印象こそずっと変わっていない。しかのし、林さんがどんな内面を持っている人なのか想像したこともなかった。

総務課のフロアには林さんのほかに、入社してまだそれほど経っていない若い女性が二人いたが、ちらっとこちらを見て、すぐにまたうつむいて仕事に戻った。

わたしは林さんのデスクに近づく。



「あの一」

わたしが声を発するよりも先に、林さんはA4サイズの茶封筒を差し出した。

「必要なものは全部ここに入っているの確認して下さい」

「ええと、でも」

なんとか他に情報を聞き出したいくて林さんを会話をしたかったが、林さんは電話の受話器をとって電話をかけたいからもういいかというジェスチャーをした。話はこれ以上できない、余計なことをここで喋るなと遮断されたように思えたので、わたしも諦めて茶封筒を受け取って部屋を出た。

自分のデスクのあるフロアに戻ると、酒井さんと五箇山さんが仕事もせず、まだお喋りを続けている。



わたしはコートをとって、茶封筒をバッグに押しこむと、

「また店のほうにいかなきゃならなくなって」

と慌てるそぶりで部屋を出ていくことにする。

「あらー、おつかれ。今日は非番だったんでしょ、大変ねえ。最近は深夜の勤務が多いみたいだし、身体壊さないでよー」

五箇山さんが愛想よく言ってくれる。

「ありがとうございます」

わたしは返事をする。酒井さんも「いってらっしゃいー」とニコニコ手を振ってくれる。

裏でなにを言われているかわからないとはいえ、たぶんあの二人にとってわたしはなにか害のある人間ではない。



国際線ターミナル事業の責任者に抜擢されたといっても、24時間勤務の重労働を負っただけで、なにか華々しい立場にたったわけでもない。長くいる独身のわたしが厄介な深夜勤務のある仕事を押し付けられてかわいそうねえという意味の同情の言葉をあの二人からよくもらう。家庭のある二人にしてみれば、深夜勤務なんて、少しばかりの管理職手当をもらったって心底やりたくない仕事に違いない。厄介なことを引き受けてくれて感謝されてもいるらしかった。

しかしそれはあくまでわたしがこれまでのように地味に目立たない限りにおいてだろう。もし出張でいきなりNYに行くことがわかったりすれば、彼女たちはそれなりにまたケチをつけたりするのだろう。現に海外出張の多い、マネージャーの単塚さんがあんなふうにもケチをつけられたり、あらぬ噂をたてられたりしている。

わたしは挨拶もそこそこに慌ててフロアをあとにした。もう夕方が近い。荷造りをしなくては。茶封筒の中も確認しなくては。

それよりも。

そろそろ「彼」が半日のフライトを終えて、JFK空港に到着する頃なのではないか。

また新しいツイートを彼がしているかもしれない。

わたしはiPhoneを取り出した。

つづく。



まずは航空会社のサイトで調べると、今朝羽田を発ちJFKに向かった飛行機は、NY時間の早朝5時過ぎに到着の予定だった。

NYとの時差は14時間で、こちらでは夜の7時過ぎにNYに到着というわけだ。とすれば、到着までまだあと2時間くらいかかる。

最近機内でインターネット接続できる航空会社があると瀬川ら航空マニアたちがツイッターで話題にしていたような気もする。でも、NYに到着してからのものが読めればよいわけだし、とりあえずは明日の出発の準備をしてしまうことにした。

電車に乗ってそっと茶封筒をひらいてみる。



明日の飛行機の予約表、NYのホテルの予約表がプリントアウトされたものが入っていた。それぞれに、このまま受付に出せばよいと指示されているポスト・イットが貼ってある。神経質そうな、極細のこの筆跡は初めて見る気がした。少なくとも総務の林さんの文字ではないように思える。

そして、海外に行くときに、なにが必要なのか考える。

そう、パスポート。慰安旅行などを除いてほとんど海外旅行をしてこなかったくせに、これだけは絶対に期限が切れないように更新をしてきた。残存する期限に余裕を持たせるようにして。

いつかなにかあったらに備えて...とは思っていたが、それがこんな形でやってくるとは思って
いなかった。わたしがイメージしていたのは、自分がなにかとんでもないへまをやらかして、日本
にいられなくなった挙句の逃亡だとかそんなことに使うのではないかという暗いものだった。
あとは今はアメリカに入国するのならESTAの事前登録をしなくてはならない。
荷物に関しては、最低限の衣類でよいだろう。機内持ち込みできるサイズのキャリーバッグにぎ
っしり詰めるほどに必要なものは思い当たらない。
そんなことを忙しく考えながら大崎駅に到着する。



必要なものをまとめて買うことのできそうな駅の近くのショッピングモールに飛び込み、ドラッ
グストアで風邪薬と鎮痛剤、歯ブラシセットと基礎化粧品のトラベルセットを買う。次にファス
トファッションブランドの店にいき、厚めのタイツと靴下をふた組ずつ、保温性の高いインナ
ーシャツ、耳はファーで覆える暖かそうな帽子も買った。ほかに必要なものが思い浮かばない。
なにが必要になるか、そもそも旅慣れていない上に、旅の目的すらあやふやなのだから想像しよ
うもない。あと足りなければ現地で買うしかないだろう。

ショッピングモールを出ようとしたところで本屋が目に入った。ガイドブックを一冊持ってい
てもよいのではないか。iPhoneがあるとはいえ、紙の地図も一応持っていたかった。わたしは旅行
書の並ぶコーナーでNYのガイドブックを手にとってどれがよいかパラパラとめくって比較した。
そのとき、背後から名前を呼ばれる。驚き、縮みあがって思わず本を落としてしまう。
振り向くと、瀬川が立っている。

「やあ、偶然だね」



瀬川に偶然と言われても普段はなかなか信じられないが、今日の瀬川の様子は、本当に意外だなどという驚きに満ちていたので、あるいは本当に偶然なのかもしれなかった。

落としてしまったガイドブックを瀬川が拾いあげてくれながら、

「NYに旅行でもするの」

と言う。

「まさか」

とさきにそう答える。

瀬川も本当にNYに行くなどとは思っていないらしく、笑いながらガイドブックをあった場所を自分で見つけてそこに戻しながら、

「今の時期のNYなんて、それこそ凍えてしまうくらい寒いだろうね。行くなら初夏か秋がいいよね」

と言いながら、今度は別のガイドブックを手にとった。

「年間の気温のグラフがあるよ。冬場は寒いとマイナス10度以下になるって書いてある。東京よりよほど寒い都市なんだね」

瀬川は自分が待ち伏せをしていたという後ろめたさがないせいか、今日はリラックスしている。おかしくなる以前はこんなふうに寛いで喋る人だったなあと思いだした。

「どれか、買うつもり？」

と問われてわたしは首を降る。



瀬川と並んでショッピングモールから帰宅する道を歩いていると、

「そういえば、オフ会で君も会ったことがある奴もいると思うんだけど、飛行機好きなメンバーが今晚僕のうちに何人か来るんだけど、その中の山本って奴、航空業界の雑誌の編集者なんだけど、覚えている？」

「山本さん…。うーん、どうだったかな」

オフ会では編集者という職業の人もいたように思うが、山本という人物に特に記憶はなかった。

「あいつも今朝の羽田空港のセレモニーに取材で行ってたんだって」

わたしはギクッとする。今朝のニュースに空港でのセレモニーの様子が紹介され、そこに「彼」が大写しになってその後ろから覗き込むわたしの顔もまたテレビに写ったのを瀬川が教えてくれたことを思い出す。

「君もセレモニー見ていたんだから、なにか興味のある話とか聞けるかもよ。よかったらうちに寄っていく？もう何人かは集まってて、僕は足りないものを買に出たんだよ」

そう言って瀬川は氷や割り箸の入ったコンビニの袋をわたしに掲げてみせた。



普段だったら遠慮したいところだが、知りたいことについて少しでも情報があればと心が動いた。とはいえなにが知りたいことなのかもよく分からないが、今のわたしにはあまりにも情報が不

足しているように思える。

結局、荷造りと呼べるほどの大袈裟な作業は必要ないようだし、あとは今日の終電でまた羽田に向かえばいい。

あの新しいターミナルで、自分では初めて「お客」として時間を過ごして、明朝の出発を待ちたい気分だった。どうせ今晚、家にいてもうまく眠れそうにない。早朝タクシーを使うようりは好きな空港という場所にいたほうが落ち着けるような気がするのだ。

「じゃあ少しだけ寄って行っていいかな」

わたしは瀬川のうちにあがっていくことにした。



マンションのエントランスからエレベーターに乗って、瀬川の部屋のある23階で降りる。口の字型のタワーマンションで、部屋がぐるっと取り囲んだ中心部は空洞となって地上から屋上まで吹き抜けの細長い空間になっていた。その細長い空間はそのまま夜空に突き刺さって夜の色をしていた。各階の手すりに観葉植物が飾られ、それがオレンジ色のライトに照らされてつるつるした葉っぱが作り物のように光っていた。

瀬川の部屋には確かにわたしにも見覚えのあるような面々が集まっていた。

広いリビングからは、もう暗くなった都内の夜景が見渡せた。

「なんとちょうど大崎駅のあたりで会ったんだよ」

瀬川が皆にわたしを紹介する。

「わたしも最寄り駅が大崎なんです」

言い訳するみたいにわたしは言葉を付け加える。

「あ！久しぶりです。羽田のコーヒーショップで働いている方ですよ」

30代と思われる、いかにも業界人ふうの服装をした男性にそう言われる。

「あ、山本と言います。航空業界誌を編集してるんです」

と、その男性は続けて付け加えた。

この男が、さっき瀬川が言っていた、今朝の就航セレモニーに取材に来ていたというなのだろう。そういえばオフ会で何度か会っていた。

「こんばんは、そうです。コーヒーショップで働いてます」

そう言ってわたしも頭をさげた。



「彼女も今日はNY便の就航セレモニーを見学してたそうだよ」
瀬川が気をきかせたつもりでそう山本に教えた。

「ちょうど今朝は勤務で空港にいたんですよ」
慌ててわたしも付け加えた。

「しかも、今朝のニュースに彼女が写っているのを僕がちょうど目撃して知ったんだよね」
と瀬川が言うので、

「そうみたいですね、恥ずかしいなあ」
ととぼけた顔をしておく。



「へえ、テレビニュースに映ったの。どこの局？」

編集者の山本が手にしていた缶ビールをテーブルに置くと、スマートフォンを胸のポケットから取り出した。

反射的に瀬川がどこのテレビ局を答えて、

「そこの局のならあるよ」

と山本がスマートフォンのディスプレイをわたしたちが見え易いように掲げた。

そこには今朝のセレモニー放送したニュースの映像が再生されていた。

「いくつかの局のニュース映像は契約して放映後すぐに手に入るようにしてるんだ」

山本は言う。編集の仕事をしている人だとそういうこともするものかと、わたしは朝一度見てショックを受けた映像を、今度は冷静に眺めようという気になる。

オープニングのゴスペルの模様、航空会社の幹部の挨拶などの映像が流れ、さらにフラッシュをたかれた会場の真ん中で、紅白のテープカットが行われ拍手、その映像のあと、「彼」がアップになって映った。

特に彼の顔を見て、その場にいる誰かが反応する様子もない。



そのあと映像がひき気味になって、わたしの顔が見切れる形で映り込む。

朝見たときと同じだ。しかし今回は少し冷静なせいか、それほどわたしの動きが怪しいものとして映ってないように思われた。なにかを盗み見ようとしている人だとはこの映像では判らないのではないのか。わたしの視線は絶対に彼のスマートフォンを狙っていたはずだが、この映像を見るかぎりには、そういう挙動不審な点は見当たらない。

「ほんとだ、ここに映ってるね」

山本が笑いながら言い、

「やっぱり美人だからどこにいても目立つね」

という声がした。

やはり缶ビールを持ってディスプレイを覗き込んでいた白川という男性だった。オフ会で何度か会っている。

「なにかものすごい嫌味ですか？」

挑発に乗っても仕方ないとはいえ、わたしはそう口走っていた。

「嫌味って？」

白川は平然と答える。

この男性からこういう扱いを受けるのは初めてではなかった。

わたしのような醜い容貌の女性に、わざと「美人だ」などと反対のことをいっては傷つけることを楽しんでいるとしか思えなかった。

しかし瀬川まで意外な言葉を続ける。

「美人なのに自分が醜いって彼女たぶん信じているんだよね。謙虚なんだよ」

なぜこの人達はこんなメチャクチャなことを言ってわたしのことを貶めるんだろうか。

もともと失礼な扱いを受けることには慣れていたはずなのに、今日は怒りがフツフツと湧いてくるのを止められない。



しかし、

「しかし、さっきの男性、なんか見たことあるなあ」

という白川の一言で正気に戻った。

「ほら、まずアップになって映っていた男性」

と、白川が山本に録画映像を巻き戻すように催促する。

「彼」のことだ、きっと。

そして山本が映像を「彼」のアップのところで一時停止させた。

「俳優かなにか？」

と山本が言い、

「えらいハンサムだね」

と、瀬川も請け合った。

「うーん...、いや、僕も仕事で時々国際線に乗るけど、その度に時々見かけるなあと思っていた人だわ、どうも。ご覧のとおり目立つから、覚えてる。ビジネスクラスってそれほど人が多くないから、常連の中には見た顔がある。で、この人は特に目立つから。とにかくカッコいいんだよ。ちょっと日本人離れしてるっていうか」

白川は商社に勤めており海外出張が多い。それでよく利用する飛行機にだんだん愛着を深めて言ったと話していた。

「お前はそうか、いつもビジネスクラスに乗ってるんだなー。いいな、スッチャーからの対応も違うでしょ」

と瀬川が恨めしそうに言って、

「いや、彼女たちのターゲットはビジネスクラスのサラリーマンなんかじゃなくてファーストクラスのお客様たちでしょう」

と白川が言い、笑いが起こる。